

## 焼けた文樂座の斷片

大正十五年十一月二十九日、私は朝飯を認めてゐると、文樂座が焼けてゐるといふ電話を受取つた。ハツと思つた。毎月狂言の替り目毎に、その木戸をくゞる、御靈の南門の石の鳥居をくゞるにしても、西門の路次から入るにしても、ゴミくゞとしたこの宮地の隅つこの文樂の棧敷へ通るたびに、火を恐れてゐたのだ。とうく事實となつて現はれた、豫期した恐ろしい不祥事に直面したのだ。

自動車を、私の勤めてゐる大阪毎日新聞社に飛ばした。車中で思つた事であるが、文樂はどうなるだらう？ 今の文樂の焼跡にはとても再築は許されまい。——とすると、が、文樂の再築は松竹の白井氏は、恐らく採算を度外視しても、遂行するにきまつてゐる。御靈神社や附近の人々は、とうの昔から移轉を迫つてゐたのだ。兩三年前に、文樂座が道頓堀の角座と朝日座との間に移轉するので、その敷地が松竹へもう登記されたときまで噂された事があつたのだ。然しそれは單に噂に止まつたやうだ。

文樂座が引越すにして、盛り場の道頓堀を選ぶことは疑ふ餘地はあるまい？ 既成の芝居小屋を文樂座に改築するのではあるまいかなど考へてゐると、車は京町堀の電車通りを奔つてゐる。京町橋の上は

人の黒山。その先きの御靈あたりには、白い煙が濛々としてゐる。あの懐しい文樂座があゝの白い煙の下に燃えてゐるのか、——と、何とも知れぬ哀愁を覺えた。

毎日新聞社へ着くと、文樂の歴史を調べたり、想出話のつゞき物を執筆したりしてゐると、堺卯へ飛火したといふ號外が出たのだ。この社内に配布された號外を見て、因縁に驚き、不思議なる偶然の出來事に直面して、何かの因果があるやうな心地がした。

といふのは、文樂から堺卯へは三町ばかりも隔つてゐるのだ。白晝に、しかも消防の手の届いた大阪の眞ン中で、あれしきの火が三町餘の處へ飛火するさへ不思議だが、不思議はこれに止らぬ。文樂座がもと松島の今の八千代座にあつたのが、大阪の西のはてで地の理を失つてゐるので、興行毎の不入、且ついなる彦六座(東區博勞町)に蹴落されさうなので、大阪の中心である船場へ引越さうとした。その時に第一候補地とされたのが、當時草蓬々と生えてゐた今の堺卯の地所だつたのだ。堺卯は大阪に名ある宴會茶屋である。

が、引越す位なら、少しは客足のついてゐる御靈地内の土田の席が持つてゐた興行權利を買つて、新たに御靈社内西南の隅に新築したのが文樂座で、それは明治十七年であつた。そして第一候補地の空地には、その後になつて堺卯が建築されたのだ。話はこれだけだが、この因縁に因果關係があるやうに思

ひなされたのも私の愛惜する文樂座の火災を、我が家が焼けたやうに、心を痛めた私の神経の弱り目に蝕む一種の迷信の業だつたと、今では思つてゐるが、「その日」には變に感傷的な感じが先きに立つた。只一つの文樂座といふ小屋の火災が、何故にそれほど、私なり淨瑠璃を愛するものゝ心を痛めさすのだらうか、道頓堀の芝居小屋が焼けた場合は、確かに感じが異つてゐる。それは何故だらうか。歴史ある由緒の深き「文樂座」といふものを愛惜するが故のみではないらしい。それは何？

何人もいはず語らずのうちに、淨るりの將來に覺束ない、壽命の末を感じてゐるのではあるまいか。「文樂は滅亡する」「否しない」と直反對の事をいつてゐる人が二通りあるが、「する」「しない」の兩者ともに、人形淨るりの「壽命」を感じてゐる。歸するところは實は一つなのだ。

この場合に、その本城が焼落ちたのだ。只の建造物が焼けただけだとのみ、實は樂観を許さない。文樂座は再び松竹の手で再築されるを疑はないが、どんな形式に再築されるか、それが問題だ。

誰れでもがすぐ氣のつく事だが、人形淨るりは、世界に類のない發達を遂げた「偶人劇」だから、昔さながらに保存せよ、嚴格なる昔の口傳、法則、不文律そのまゝ保存せよ、——といふ説も、何といつても「時」の力には敵はない。淨るりとても「時」の埒外に出ることが出来ないのだから、激甚なる發達變化の街頭に引出し、そして生存の權利を主張するならば、「時」につれて變化する事は當然だといふ

説。その二つの道がある。

人形淨るりのために、果して何れの道が選ばれるべきだらうか。私はいひたい。果した嚴格なる意味において保存といふ事が出来るだらうか。疑ひなき能はずだ。現に十年一日の如く見る「文樂座」が、この十年の變化は、考へれば恐ろしいほどの變化を見せてゐるのだ。この「文樂」をどう保存するか、その實行方法が聞きたい。

これを街頭に引出すとして、現に自由競争の巷に呻吟してゐるが、この文樂がこのまゝ一營利會社の手で興行を續けて行くとして、どんな運命をとるか。これも寒心に堪へない。

それならば、今後の文樂はどんな方法で、興行を續けてゆくか。研究問題はこゝだ。私に一案があるが、この斷片的の感想に述べべくもないから、他日の機會に譲るが、さし當り人形淨るりの熱愛者がなすべき三つの仕事がある。これは項目を擧げるだけで事は理解されると思ふから、最後にこの緊急なる三つの仕事を述べておかうと思ふ。

その一は、人形の動作を、連續的に映畫のフィルムに、まづ收めておく事が一つ。

その二は、各太夫の——保存に値する太夫の淨るりを、出来るだけ完全に蓄音器のレコードにとつておく事。但し現在、世間に出てゐるレコードとは異つて、人形の動作に合ふやうに、單なる語り物

としてではなく、「人形芝居」の淨るりをレコーディングしておく事。

その三は、我が文壇に只一つの「人形淨るり」の歴史がない。これが完成を期する事。

この三つがさし當りなさるべき、又爲さねばならぬ緊急事だと思ふ。

日本の歌舞伎の歴史も、唯伊原青々園氏の列傳體の「日本演劇史」と「近世演劇史」とがあるのみだ。

そして歌舞伎にあつては「舞臺の歴史」があつて、「脚本の歴史」がない。然るに人形淨るりに至つては「淨るり」の文献的の歴史は不完全ながら一二を數ふる事が出来るが、これは又芝居と反對で、人形の舞臺の歴史即ち「操の歴史」は唯の一本さへもないのだ。そして未だ何人が試みつゝあるといふ話さへも聞かない。

「人形の歴史」は、もう現在において着手しないと到底出来ない。既に手遅れであるが、それでも今にして何人かこの困難なる事業に指を染めないと、到底大成はむづかしい四圍の事情にある。この話を嘗て文樂座の竹本土佐太夫氏に雑談の折りに話した。すると土佐氏もとくに憂ふるところであつたから、とにかく古老が尙現存してゐるうちに、「人形淨るりの歴史の資料」を掻きあつめておかうといふ相談が持上つた。

土佐氏と私とのこの話が動機となつて、この夏七月九日に文樂座の主なる人々が集まつて、實はこの

「操」の資料蒐集の企てを實行する事に話は進められた。會するもの土佐太夫を始め文樂座の紋下津太夫、古靱太夫、叶太夫。三味線では鶴澤友次郎、斯道の古老としては岡田翠雨氏、故攝津大掾の嗣子二見文次郎氏、この七氏に加ふるに私が雜魚のと、混りをした。

偶然に會したこの九日が、月こそ違へ、故攝津大掾の命日に相當するといふので、この會を因縁あるものとして「九日會」と命じたのだ。で、天保度以後明治大正の人形淨るりの研究を記録に止めておかうとの企ての實行に取かゝつたのである。天保度以後とさしづめ定めたのは、「この生きたる文獻」の集大成を、最も急務としたからである。

私は唯「九日會」の書記を勤むればいゝと心得てゐる。どうぞ隠れたる斯道の研究者なり古老たちは私の微力をお助け下さらん事をこの機會に御願ひしておきたい。文樂座の火災は、私をしてこの仕事に一層の焦慮を感じしめたのである。(大正十五年十二月二日夜)